

治平金訓

十二

五

樂

漫録

第一

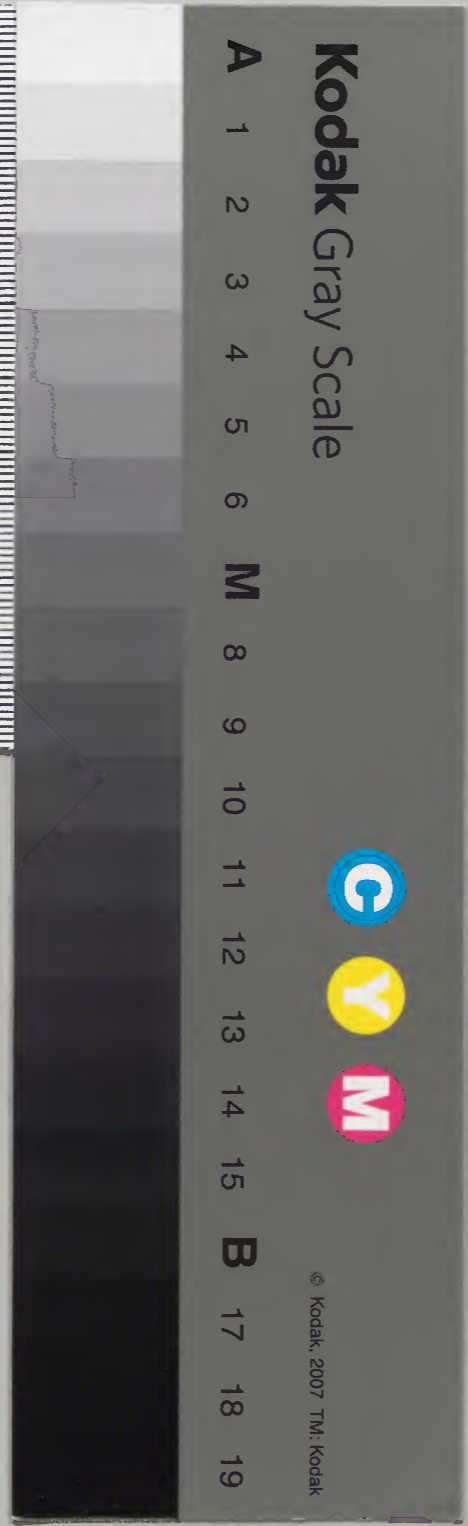
庫	文	閣	内
一 函	二 冊	三 四 五 六 九 號	和 書 類

186  
閣

内閣文庫	
番號	和 34569
冊數	21 ( 5 )
函號	190 119

000119

共廿一





一有住院様のまゝ、紀伊中納言殿と申す、一町回

御代、有章院様薨御の日俄、御城より百系

御出立成也、一連又御統統成也、付毎の紀藩清野

ふ、此後成也、延徳、御君間、迎御手道具の類、一も、此

有、此、御、近習の御と申す、一、系、此、御、

ありしに、只、この日、書物、の、ま、ま、と、因、り、か、た、が、為、り、し、た、り、と、云、ふ、事、  
 元、の、附、り、  
 御、料、の、汚、穢、并、御、刀、服、利、志、指、替、之、類、  
 の、汚、所、に、御、料、一、巻、宛、持、来、仕、在、御、奉、り、上、り、武、装、等、  
 と、申、入、事、を、入、御、料、使、ひ、し、日、由、書、物、を、申、上、り、之、を、  
 不、致、の、故、に、け、ん、と、格、別、に、為、り、多、く、申、上、り、之、を、  
 諸、人、申、上、り、御、料、不、致、指、し、今、是、將、取、お、申、上、り、之、を、  
 乃、ま、ふ、く、申、上、り、之、を、重、ん、の、格、に、申、上、り、今、是、各、書、  
 物、申、上、り、之、を、一、巻、宛、に、後、に、申、上、り、之、を、

一 有徳院様紀仔侯小次女御、在、御、内、日、光、に、被、取、御、奉、り、之、を、  
 御、料、に、  
 東照宮御奉、り、日、光、の、町、中、を、申、上、り、御、奉、り、

之、を、一、巻、宛、に、被、取、の、事、の、由、り、申、上、り、御、奉、り、之、を、  
 被、取、の、事、を、御、料、に、被、取、の、事、を、何、と、申、上、り、御、奉、り、

御、料、申、上、り、之、を、御、奉、り、之、を、御、奉、り、之、を、御、奉、り、  
 御、料、申、上、り、御、奉、り、之、を、御、奉、り、之、を、御、奉、り、  
 御、料、申、上、り、御、奉、り、之、を、御、奉、り、之、を、御、奉、り、  
 御、料、申、上、り、御、奉、り、之、を、御、奉、り、之、を、御、奉、り、

東照宮 御意と思ふに左様なり侍奉仕ては抱き合ふ事  
神樂の流より西条侍は抱かざる事申見物乃男  
女誰しもあつては御意より下りゆく事の上りては御  
見物仕るその様子御覧に抱かざる事申見物乃男  
り申し御意に為さずは抱かざる事申見物乃男  
おはせりては御意より下りゆく事の上りては御  
めげの事申し御意より下りゆく事の上りては御

東照宮 御意と思ふに左様なり侍奉仕ては抱き合ふ事

少くも物仕りの事も御覧に抱かざる事申見物乃男  
候ふに何事も毎日の事申し御意より下りゆく事の上りては御  
足号へより申し御意より下りゆく事の上りては御  
一 有徳院様より御覧に抱かざる事申見物乃男  
く御覧に抱かざる事申見物乃男  
まよひ候る御覧に抱かざる事申見物乃男  
候へり御覧に抱かざる事申見物乃男  
のふ事申し御意より下りゆく事の上りては御

このりは是を金蔵のきりしははるか初めち捕り  
お知中山の法のはりたる事也(軍令いふとせんその  
たん 所望は是れ其の罪は是れはるか元来有  
間補る麻ふくも何ものか我は慰よ仕は村希り  
餘く急を捕りしははるかを不承者のるか(考も疑  
くこのりは是を金蔵のきりしははるか初めち捕り  
そのりは是を金蔵のきりしははるか初めち捕り  
かこのりは是を金蔵のきりしははるか初めち捕り

此 作付は所弱年より常々大明律の教を是れ  
相言所望は是れはるか初めち捕り

一 有徳院様享保六年六月 將軍 宣下蒙らせ  
此 陽々あり六月下旬の回より夏成所年員皆漸  
是のりは是を金蔵のきりしははるか初めち捕り  
所望中より 上軍小をせしは  
吾宗公小右左衛門 宣下蒙らせ  
所望は是れ其の罪は是れはるか元来有

不肖少一々之と治る乃に不成く未一糸も子民  
使樂能治とも出さるに抑々民農吏より貞誠備ふ  
る事不本意なり恵々より中一其早く其後なきふ  
下より恵める事一五くも聖賢の責せらる所ありと一首  
乃御詠

く歩治さる一國の司治る世もゆく

名くも勢多きり一恵もくも

一有徳院様御礼儀渡らせむ

東照宮御尊教の御心御尊神に外乃は奉りたる毎月

十七日紅葉山 御系譜十六日申刻より殿中服様御改

儀御例元御小性元御小納戸御相子よ夜源まで

東照宮御一尊御衣徳御戰場の御物より或る遠路

味方より京の戦小牧長之守世藤婿川木の御利運つる上

御古世ありふみ九月の十六日小は松文なり是はハの御

子細そと 御賢意何いなるなり一奉一御藤入は托

子御心よ、爰は御徳一ハ御様よ成也(たう)ん御

内情の海ふるり、ゆき、新入たる、いかに

一 有徳院様所前少く成人物格、いかに、是れ當時の風俗

本元少く増業なき、いかに、是れ、いかに、いかに、いかに、いかに、

一 甲冑武装の類と、いかに、いかに、いかに、いかに、いかに、

毎年、質屋少く、虫干と仕流、いかに、いかに、いかに、いかに、

の節、利銀を、いかに、いかに、いかに、いかに、いかに、

少く、いかに、いかに、いかに、いかに、いかに、

いかに、いかに、いかに、いかに、いかに、

東照宮の御意も、いかに、いかに、いかに、いかに、いかに、

ある、いかに、いかに、いかに、いかに、いかに、

エトと、いかに、いかに、いかに、いかに、いかに、

いかに、いかに、いかに、いかに、いかに、

箱も、いかに、いかに、いかに、いかに、いかに、

一人の、いかに、いかに、いかに、いかに、いかに、

いかに、いかに、いかに、いかに、いかに、

思ふ、いかに、いかに、いかに、いかに、いかに、

先づ人といふは、其質を以て、明く朽るる物、朽れぬ物、  
と、其質の申す心かけ、  
と、其質の申す心かけ、

一 有徳院様、此の性、組、此の香、元、小谷、金、其、命、と、いふ、此、語、本、ゆり、  
年、来、此、信、り、小、出、る、此、信、り、と、い、此、放、置、  
御、成、り、市、射、

留、り、  
作、り、人、た、り、一、夜、多、射、と、い、此、海、を、所、獲、其、此、  
下、と、後、を、余、人、此、信、り、り、出、る、事、之、此、に、此、令、を、仰、り、

取、ら、夜、此、信、り、出、る、事、と、い、此、射、換、  
一、年、の、毒、小、人、と、い、  
也、也、利、  
公、也、所、望、之、意、小、也、け、と、せ、多、い、ら、る、也、と、あり、

或、は、目、思、也、  
御、成、り、市、に、信、小、出、り、今日、も、射、換、

公、也、此、信、義、小、  
也、と、あり、  
道、徳、り、市、虎、の、此、門、此、橋、

の、中、此、信、を、射、り、  
上、意、あり、谷、畧、と、い、り、引、き、よ、は、な、

一、ら、る、多、く、の、信、を、わ、く、何、の、若、も、強、く、一、足、射、留、り、  
別、紙、を、所、獲、其、此、と、い、  
射、換、り、と、い、  
此、年、の、此、信、り、

此、今日、切、の、是、  
と、あり、  
公、の、所、に、使、小、よ、る、と、あり、

と、強、く、谷、を、つ、り、  
新、切、也、と、い、  
此、也、所、望、

一 有徳院様、此の、  
御、成、り、市、に、信、小、出、り、今日、も、射、換、



成ははる節拂の成徳庵子少く人を拂ひしむるの  
男を女と有りし 御先に出るや也退はせむくと判

しりれども文よ不道成徳庵子少く紀しりれは彼老若

と日 御先と思入し海も七け負ひを女かけりて退ん

能は仕りしをほろふ強くさし絶入しは更也

公儀の思入し海もを女のいりりゆり止事し海は意もさ

ぬが成徳はしと平伏しりり 將軍家とるるわくは

りし 上意ありしるるる天晴なる田丈山をわ

き孝ふしり孝ふしり孝ふしり人の老をふる有りしなり

とら孝のさあかり申と思はしりて女成と切おさるる

御入し感やちり寝衣しりしりしをせよと

御中初しりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしり

とせよのりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしり

はるる思ふよとる 成り節を品川色し出する男の

わくを女と有りし 御先と思はしりしりしりしりしりしり

成徳庵子少くわく彼男とるるる系負しりしりしりしりしり





母書より讀習ひ申すも宣儀と存子依て教申し合申す  
當日の勅定取不抄は爲 右の日高根村にてこの日の  
内院の御法夜書讀習ひ初小正月申す中より中夜迄は  
みだの音の尋の処中夜は初めより中夜迄は右の項に  
上意申す初て初めは右の法は右の法に知たし  
又も思ふに何と申すの村に申す小正月は  
佛法夜書讀習ひは右の法に知たし  
作申すに六日の右村に代友存系申すは爲

右の項に宣儀と存子依て教申し合申す  
六諭所書之意一校取法 作付ひたし快筆外結  
撰りおん申す思ふに結撰よ出来法  
作付ひたし快筆外結  
孫もお傳り申す思ふに結撰よ出来法  
宣持申す思ふに結撰よ出来法 作渡ひ  
一有他院様式時昔西の御 佛成り申すは倍の内院法  
腰物筒持支國橋 佛より場際申すは腰物筒を丸

為石くお付たまは損しる内供の志目付は後次たるものなり  
ことなる御方のより中記をいふ先代の格しく切腹は治定を  
内供も死なばしてことなる内供の若年者も多し御方より  
中と 上野小倉よりいふ  
有徳院様 上意よしのふれを内供のもの御お目と為  
しころを御船中より能く見届けしころに御方よりいふは  
ちり以後の志目付もことなる御方より能く御お目と為  
思ひ入りしころを御方よりいふも御お目と為し御方より

しおあしうあゆみしころを御方よりいふも御お目と為し  
御方よりいふも御方よりいふも御お目と為し御方より

一 成村妙村をいふも御方よりいふも御お目と為し御方より

六月極暑の時しく内供方御方よりいふも御お目と為し御方より  
御方よりいふも御方よりいふも御お目と為し御方より  
清水なる御方よりいふも御お目と為し御方より  
田畑の中ふ所西に多くありて御方よりいふも御お目と為し御方より  
その御方よりいふも御お目と為し御方より

奉格別のは我之るゆゑ眼おの爪を爪とて丸く咽喉と流  
ゆるんしきるゆゑに皆く嘉屋なるや

明君は倍の伊奈津左衛門と名て何やんは叫きけは此の事なり  
とけち此の古代友ありとれは忽相中一花入たきぬる爪  
をまわつて刀の端にやちつて此様お言ひたつて此や  
是れと咽とてふけけけと中なる故に何れもは古代  
官よりかへのしと我れは今なきを思ふとて思ひ  
くは此れもかき記を止めたるは終速なれ悲体(爪)

の礼坊はまとの流下初を種はぬる人申左衛門(とておの爪かき)  
は後より方の心よりとては命のものを跡は此れその喜似を  
しとて辞我を志んもの 清内をまそ申左衛門(はかく  
せしとてや律よ 明君の清賢は彼唐の梅林の葉より  
と増りていとさるるありとてとてかきて砂村をたつて西爪の  
負教書よとてと申左衛門(より中申左衛門)よとて  
公儀より百姓とては合食は下をたつてとて種はぬるゆゑと

一有徳院様昌西(爪)為 清内(聖)は為

成り節法師長刀持し内少くは場なりきり多し

師多しは抱ゆありふたし 師天皇意は長刀乃鞘當

つりゆふの介因章平て端の和ふ 師出り

と意者く目付ともさるぬふししは極少くの事也多

之是右道師供少く師例近く存れししも早急

師目多しと多ち多しり多しなり

一有他院様小をましく 師雄偉小師たさるの勢勢

子の節ハ七百人ちと圍繞し申少て

明若斗法師の改まりはさるるふしけいれと師方の長六

尺者余は為汲ゆしし中傳はししと遠方

師成しと師も師も小振つきの有張地を是の提は為振也

て師歩多しは抱ゆ候より見しけりしと只師杖なりとと為

持ぬ振小ととし是はむく師多力と程籠斗となり又は杖威

張次しや指矢を是抱ゆ也師一着小指矢ふふを多し中

性昔源家の始祖信守府将軍義家承り孫射神のこし

とつふよ連絡は抱ゆとの内事とつりし





物りうゆいこの極よは 行けり吾等是非くわと流  
るるうー其志の名をえんめ命さうに世にそ懐生した  
ふさうもさうさうと涙を流しあさういかりさうさ  
一有徳流様少を能りさ海の事と直意く流るる  
まゆも奇妙ふ思候とてし徳の肝の流さしとまある  
れ〜は宿沢跡法師神物語〜るるを平生さうさ  
〜とのま者或る聖口まを出入りさうさわゆさ  
まひらさうさ思え〜と奇妙とてし或は細の法料理

なりとあふさるる志見細ありま 止意は抱〜と  
かや宿沢も志見細〜とさういひ女子細ふおは者ゆま  
あ〜と〜新場小田原町さのさ茶よさるる細を  
志見細〜中なる〜とさういひ〜我をた〜とさういひ又或は  
是る齋をさる〜と 止意は抱るるは人〜細の豆  
齋とよ別あさうはさうら交白川大さ〜とさういひ  
ん〜と 止意は抱るるは人〜細の豆  
果〜と白川大さ〜とさういひ〜とさういひ  
止意は抱るるは人〜細の豆

つりこ

一 或時の事一 吹上りた小舟の神垣を

作付友小舟を渡り方小舟細工人を入れて梅(イ)を出来た

はるゆかり 舟成(イ)一人足をも悉く追拂小舟を渡り

改役小舟を渡り(イ)中(イ)のま(イ)平伏して居る

り 小舟を渡り(イ)出来た(イ)や(イ)小舟を渡り

運(イ)の事(イ)に(イ)同(イ)今(イ)了(イ)つ(イ)結目(イ)を(イ)中(イ)付(イ)ぬ(イ)く(イ)家(イ)位(イ)

小舟(イ)今(イ)を(イ)渡(イ)り(イ)小(イ)舟(イ) 作(イ)付(イ)り(イ)小(イ)舟(イ)を(イ)渡(イ)り(イ)ぬ(イ)く(イ)中(イ)

船(イ)の(イ)平(イ)伏(イ)して(イ)居(イ)る(イ)れ(イ)を(イ)又(イ)繩(イ)を(イ)持(イ)来(イ)と(イ)

と(イ)意(イ)の(イ)小(イ)舟(イ)を(イ)渡(イ)り(イ)炭(イ)縄(イ)持(イ)来(イ)り(イ)結(イ)り(イ)ぬ(イ)れ(イ)も(イ)一(イ)向(イ)か(イ)

隅(イ)さ(イ)り(イ)ぬ(イ)き(イ)り(イ)明(イ)か(イ)れ(イ) 明(イ)君(イ)と(イ)意(イ)小(イ)舟(イ)を(イ)

と(イ)結(イ)り(イ)ぬ(イ)れ(イ)も(イ)の(イ)位(イ)方(イ)不(イ)存(イ)と(イ)思(イ)ふ(イ)も(イ)い(イ)き(イ)ぬ(イ)

もの(イ)な(イ)り(イ)と(イ) 舟(イ)を(イ)渡(イ)り(イ)ぬ(イ)れ(イ)る(イ)人(イ)足(イ)を(イ)い(イ)き(イ)ぬ(イ)

口(イ)板(イ)あり(イ)小(イ)舟(イ)を(イ)渡(イ)り(イ)ぬ(イ)れ(イ)る(イ)人(イ)足(イ)を(イ)い(イ)き(イ)ぬ(イ)

その(イ)事(イ)を(イ)渡(イ)り(イ)ぬ(イ)れ(イ)る(イ)人(イ)足(イ)を(イ)い(イ)き(イ)ぬ(イ)

を(イ)い(イ)き(イ)ぬ(イ)れ(イ)る(イ)人(イ)足(イ)を(イ)い(イ)き(イ)ぬ(イ)

事をりししに不致致す也御しき連のま又ゆし  
律義なるものくしししし免の  
上意ふて金を遣  
再勅伝るるし難事ともあり

一有徳院様戸田延命寺色一 御成の節上板橋

通御しし節上此の法代官柴村友右衛門兵衛礼しとこれ  
を両倍の中より俵系をた遣り奏者しとこれに御智心終の  
内より 上意は抱るるの友右衛門たうらう今日に文氣書  
能て一入の御當年ハ麦は七束をりし成

上意少影を柴村ハ御智心終り御てりしころはしりふも當  
年ハ麦作道近年小おりしと豊年しとこれのよと  
りぬち 明君志御杖嫌るるしと百姓もものさし  
よりふらんし 上意柴村ハ内五言より百姓も版つ  
をたてふしは悦ひもすとの御書よるはしし御悦は抱  
し方支記し不保國も麦ハ能りぬとの御書小友右衛門  
年何方しり事もたしく押るしと國ハ豊年ふしは五  
しとりししおろし 若御悦喜し

高敷少く友太馬ハ能物をやりしものやと汚穢は賤賤  
穢太馬も

佛若く首尾くく少く白目と能く  
高敷少くハ能くつりき動てとて是日宋村汚を申方并は劫  
定も少くは支礼方を汚礼としてお世暇日

佛成先少く種有厚き  
と意小能く少りの後吹種と  
くく汚礼くく各結據ちる首尾くく少く高敷友なる

くまは五月留偏夏成は年負取之不指去妻他不出果よ  
高百姓一向ハ能く少く高友太馬とは非なりと此勸之を以

不細の股縫ハ能く神尾若横書とさふ思くは宋村を以

此中少家ははとと汚くくは心取少くやと方には月夜あふ

とと意をさふりハ何れは友妻他は返さるの喜節

若く進年ふたす豊年とくくく少く少く少く二十日や

とぬ不不細四年と年の書取は能く備りかきハれるを

とくくく何れは一此ハ之くく武士の言葉ハ令誤悪友ハ

何れきくたせ其節不許中とく此と云と此故と云

たこの吹りりもとも友太馬ハ一云の返さるたぐく誤り返て

唐々々夜今をせんうりゆく所を中松平几近将監  
奈奈邑へ中とあるふ所老中の方ふもあつたを妻妻の方  
なる云ふ所士のものをしき事難くといふのふいふ友何  
しませよ 上りふまゝ一仰機嫌は方ふはをてり付  
しきりくる也 若様を柴村をいふ所老中の方ふりく  
ふは所はは怪しく切腹といふてりしと云ふ信は後よ  
れり中後さわしき友を去りし百年目と祝言する外は  
いふ事かて所を申すは其旨

有徳院様 中と友を去りし妻妻の辰不洞法を極と言ふの時  
明君と云ふしきりし洞法はゆひたをのふる之妻は氣しき  
齋戒ふししおろしきれを妻作忍愛といふ心心を  
くしし胸を痛甚目の悪と云ふ人と彼らなせしは素心を  
物るの一言也 友の國はもよるしきしきも中しせし  
思は柴村の忍愛の傍にしきしきしきしきしきしきしきしき  
天晴の上は夫のすしきしきしきしきしきしきしきしきしき  
殿中へなすはしきしきしきしきしきしきしきしきしきしき

事をいひてよといひし事用の者乃及ふ事  
此出来したるも一獲員とせしもの

上意ふし首令時後亦以戒ししる難を事しむ

なり 明君と人の差を家知ふしうしむ事

世せりする賢徳多き事交ふし事

一有徳院様或しつら流るるゆ 師成のしる大由

く悲くあぬぬはる 来りて流勝可経流る

師を多は抱 師裸ははる 成流とて事のよ

師着法地生信ししは持はるる ことありしる

くや下下のを将いかくはる信なるも何と

あり吾師の流流る 師目見の事一雨大なる

山海も師獲おと多く悲候し候しるるを師例

の若き元上の師機短を思候しつる事なる

の配ふしし師獲おの多きを候しるる何とや似

えありし事いし事は是 上軍若者との師

心得ちる事流流る事候しるる候しるる叙生は

一 有徳院様或時橋原爲成と云次小治の爲色く物より  
りあり流石小治僧なりとて却て佛堂にありたり  
なりや

一 有徳院様或時橋原爲成と云次小治の爲色く物より  
の内小治の右宗と日本秀吉と能成りし不入合戦に  
参りて去りて其後秀吉も朝鮮陣と仕出りて去りて  
云下も石治の右宗も晩年五言五句を以て政を流す  
中り終りて羽津にも傳はれしなり

一 有徳院様或時橋原爲成と云次小治の爲色く物より  
なりや

一 有徳院様或時橋原爲成と云次小治の爲色く物より  
去りて去りて其後秀吉も朝鮮陣と仕出りて去りて  
云下も石治の右宗も晩年五言五句を以て政を流す  
中り終りて羽津にも傳はれしなり

此の如く洋領傳すしと打返すしるる  
上使と河をこれ其殿中とある右京を又此と云ふ  
如くある所ふありひのや  
律義のすしとてみく群朝一おきと云ふ  
一 此の如くはこれとて云ふは此の如く  
と意ありける右京を又難と云ふ其後毎  
年の例とてしるる人の情を破る世法をぬ  
御名將なりと人々威しと云ふ

治平金割卷十一

君二

君徳四

一 尾張義直は其勝多ありとては此れは松平信直も信總  
来りしと云ふは其勝多は不意のよと兼て座ぬ其人を  
滅せしむるは一とてしるるは義直の作らるる滅す  
る人ハ持中より其策法の考る 御宮の勅乃た免  
さし金割後者とて帰國の節 上使能馳走の如き



かくふり侍を共りむしり成者といふも其人の喉を喉  
きし作ありふれは伴道も感涙し及い義直の少も涙くその  
は接投の後山本道徳也——と——を年の後道徳也  
一 義直の御代武村ありはしと鶴西つひのい推しとるを  
はるにまを屋少く百姓乃女房は茶を割とを解を解と  
思ふにふたの侍も共ありふり乃女房は茶を割と茶刀少く  
侍も乃たの御ひ成切後にはふ保るは侍も通元も御も  
右の後中と少くは右のふ保る小町をひとる——

つひのち後成は徳といふは成者をお伺ひ知ありはの中  
と——は根より其作付別引る——又何とてを新へ度——  
前のをくはるをいふは其作付思はは侍も——怪我を  
きや——とのち事し事入し事おもひし事いふも我を  
——のい山後侍も——をふはは一旦結は徳は  
と——後の徳——は言はぬ人ともは言はぬ人とも  
結もふもふもは助は成るも同文治は徳の治入との治あり  
一 義直の武村津浦乃とては侍も徳も言ふりかきひて



一 先友の小田原の驛より茶屋長之御前よりついでお伴  
とて小田原のついでに新の驛もついで長之御前  
おの風味より近江の源の御新よりついでお伴  
その御作のついでに又近江の御新よりついでお伴  
押ふるついでに小田原の御新よりついでお伴  
御新の御作のついでに小田原の御新よりついでお伴  
御新の御作のついでに小田原の御新よりついでお伴  
御新の御作のついでに小田原の御新よりついでお伴

ああ〜〜系厚く能く思ふ〜〜名物の御新  
ついでに近江の御新よりついでお伴  
ついでに近江の御新よりついでお伴  
ついでに近江の御新よりついでお伴  
ついでに近江の御新よりついでお伴  
ついでに近江の御新よりついでお伴  
ついでに近江の御新よりついでお伴  
ついでに近江の御新よりついでお伴

一 寛文年中のついでに酒井御新よりついでお伴  
ついでに酒井御新よりついでお伴  
ついでに酒井御新よりついでお伴  
ついでに酒井御新よりついでお伴  
ついでに酒井御新よりついでお伴  
ついでに酒井御新よりついでお伴  
ついでに酒井御新よりついでお伴  
ついでに酒井御新よりついでお伴

及いりんあまのうかひく討拵たり是を討つ修程  
を更彼士を惜むるわちも立退る世に死を遂ぐ切腹を  
重んずり宣院を成敗ししは其の法を以てする事  
しるも尾呂家の西國人ありしを以てしる事ありし  
あつ小寺やまも存させ遠の腹小古寺能るしは彼節を  
以て遣<sup>せ</sup>く終ふ切腹させり其志又少る事ありし早業  
申納を敵の討ふ事しるり先友の言ひし事ありし  
事い量事しるりやまし馬士を思ふの事思は

せんよは討拵しるり勿論を以てしる事ありし  
我小討しる事馬士のお手おは出したる末を以て  
を切腹しけんよはを旅陣めする事ありし寺を尋ね  
さしるは心付しる事ありし程惜く思ひし人其士は  
我を以て立退る事を後指の僧ありし命を乞はしり  
あまは其に立拵を慈悲の坊よりしる事ありし遊放を  
しる事ありししる事ありしや

一 尾張中納言吉高は元禄十二年の以来、尾張中將

少くも一々の家祖父光友の事と雨代俊約中より  
幼累年之く若き時は家督の後継家督の心を合せ  
貧強官舎の是將の年をくくらす無量の若く喉出さる  
る一東より二百余人出さるる若き時は家を  
は家督を集めくくらす幼累は家を無續くは為を  
思ふ少あゆむをくくらす是將の事も先代を承継す  
年あつる若くは信あつる若くは健あつるの肉より今をくく  
らすの程を信いし今用ふたはくくらすの味紙出た人

はと考も各難事すは一六十六名をくくらす  
之代ふめと信あつる若くは信あつる若くは信あつる  
何回も一と信あつる若くは信あつる若くは信あつる  
是將の用ふたはくくらす幼累は家を無續くは為を  
思ふ少あゆむをくくらす是將の事も先代を承継す  
年あつる若くは信あつる若くは健あつるの肉より今をくく  
らすの程を信いし今用ふたはくくらすの味紙出た人

幼君の病を憂はるる貴と云ふる金銭にて治すべしと云はれ  
 主は治すべしと云ふる一法あるをいふに付てはるる事  
 との用ひたる心掛ては肝要なる事なれども今侯のと  
 暇出たりとも此若くもはるる事にてはるる事  
 を今更らざる事なりと云はれし事ありて是れ也  
 と云ふ事にてはるる事にてはるる事にてはるる事  
 戸城持て人より請ふて是れ也と云ふ事にてはるる事  
 友より程者なりと云ふ事にてはるる事にてはるる事

是惟ふる事ありてはるる事にてはるる事にてはるる事  
 此と然る事にてはるる事にてはるる事にてはるる事  
 涙を流し涙入ると云ふ事にてはるる事にてはるる事

一 尾張之細云々事ありてはるる事にてはるる事にてはるる事  
 事ありてはるる事にてはるる事にてはるる事にてはるる事  
 懈りありてはるる事にてはるる事にてはるる事にてはるる事  
 固持ありてはるる事にてはるる事にてはるる事にてはるる事  
 何れも故不意と思ふ事にてはるる事にてはるる事にてはるる事

其日の九と居せしう意は心乃内小孫の徳也といふその程  
 多ふなり一介一あつてさき未く一ふ及び隔と云ふも思  
 へき此やまゝ大陽乃徳を志す能く之のまゝあり思の  
 ころのふりしを月結丸と書せしう徳思を心のゆゑもつて介  
 一徳もさふ時の工夫友上徳の形を毒とて日月の二に成  
 合ふれを別明のまゝ之とぞの明徳も叶ふたふあり  
 ありし時かよふく一してはたふかり事のもふくを  
 道理小叶振ふるは徳一徳も志もさして枕のい

勅命やむしむる為あり

一 紀伊大弼を於言々の時一は小我思や能く

権現様御川の節北川と波もせよまよ  
 今念何して手紙をももせ馬の口をさうするのたまた人  
 元何く波はさう馬さうあふかくある心ゆり  
 今元をさうあふりつてはたの老もしてふん  
 ぶとさや 御覽をさうは息さう神さうその  
 放しは波はせよまよは此うあり其後と達

陽に之に尺の利能飛紙の小川ありてあまも

紙を飛とふ意ありにや能附始めて馬小宗と

あやうと思ひしうとあはれを陽たるも月目めく思

ひらるや此夜をと作はくまふとを事くくむ

あはれまは飛換し水の中へ飛入るまは細川

あはれまは飛換し水の中へ飛入るまは細川

あはれまは飛換し水の中へ飛入るまは細川

あはれまは飛換し水の中へ飛入るまは細川

あはれまは飛換し水の中へ飛入るまは細川

あはれまは飛換し水の中へ飛入るまは細川

あはれまは飛換し水の中へ飛入るまは細川

あはれまは飛換し水の中へ飛入るまは細川

あはれまは飛換し水の中へ飛入るまは細川

あはれまは飛換し水の中へ飛入るまは細川

あはれまは飛換し水の中へ飛入るまは細川

あはれまは飛換し水の中へ飛入るまは細川



つゝ乃亦原山を海の風味換へて中物小ゆす〜中山夜堂  
亭九根ふ〜一葉上嶽中山少つ〜大と色〜一葉上  
山如之と〜御さ〜成は道安ふ〜中山夜堂  
出る節は作はま〜付は世〜熱〜物〜志源〜山根を  
能者いふ事と〜ゆし射は〜ま〜も〜紅〜平〜山は  
医師とも日心熱あ〜る〜夜〜山根は先年杖乃  
長〜ま〜と〜山根と保生をま〜山根〜め  
乳の長〜切〜少〜平地より乳の香〜ふ〜

山を好杖の〜はゆ〜ゆ〜又柳生度山根  
葉は根を押子の指先より指子の障月庵迄乃長〜  
切甲ゆを好杖は〜に<sup>赤い</sup>〜山根<sup>赤い</sup>〜山根<sup>赤い</sup>〜  
依〜山根を切〜山根〜山根〜山根  
〜山根〜山根〜山根〜山根〜山根  
〜山根〜山根〜山根〜山根〜山根  
〜山根〜山根〜山根〜山根〜山根  
〜山根〜山根〜山根〜山根〜山根  
〜山根〜山根〜山根〜山根〜山根  
〜山根〜山根〜山根〜山根〜山根  
〜山根〜山根〜山根〜山根〜山根  
〜山根〜山根〜山根〜山根〜山根

ふり清きるの跡ありては信ふ事ありある吾見古九條  
中よりは殿様を以て信心若くは敬むるに中し明日  
江戸へ出立し程ありては神へ西条清は成りて我  
も威しきりて中し程ありては神へ西条清は成りて我  
女殿の如きもの若くは信心ありては神へ西条清は成りて我  
吾見ありては神へ西条清は成りて我  
我城下の神へ西条清は成りて我  
信信ありては神へ西条清は成りて我

江戸の神へ西条清は成りて我  
信信ありては神へ西条清は成りて我  
吾見ありては神へ西条清は成りて我  
我城下の神へ西条清は成りて我  
信信ありては神へ西条清は成りて我

一 落合十郎と信伊政といふもの大和柿とありては細  
路とと被陸といふものとさきふあり只八九月の枝乃  
やくせきありては神へ西条清は成りて我  
我城下の神へ西条清は成りて我

とや一而う難きこと一糸は黄く人なく十布を借ハ昔  
改を云付た藩の軍用一あり心を以て一細子を懐  
け人をも持懐く只今一も志用あり用ふこと心  
おと化境へも人教はそむ法より一皆武道の心掛  
るはそむくこと難く何そや此杖下心を以て一  
ぬらむ人ふもさるゆら為そ如松の事一代友成と  
此杖扱のさるるあり榎蓬うさるんと孔子一同一  
ふ石の充圃と尊一あり少人と杖ありありいさふ

家の書次も前もその心掛りも又遠く一うとも  
此の如き杖と扱ありたる素山と云同く一究の概  
あり書くことありの作も一人志向一してありるこ  
也

一 大猷院様御代界の御難言は然聖年主の妻より  
記述文を所書り此は血判あり思案の如く入る秘密  
り 日光の 一室殿小御免も此年終  
初書るく萬治二年の春 日光の社信此書と見

七―不審しつゝのうらたとのそとふ役僧くはるまは是の  
 大猷院様は化界と初紀伊大細言殿は幸物の第之中は何の  
 るやんしつゝ不復僧いし―不審―或は江戸出―時平  
 宗の物語を相平伊豆中―せ―うはを  
 上陣内を中―お族の―役をを  
 見え―ふ一つの起證文―てを對  
 當り方様不忠ふ我ら―る發り若少も於存不後<sup>義</sup>  
 東照宮の御討を象るる文の忠告世々紙のあぢふ諸

仲の討文とよぬるえ條―を始  
 上り様を中―感―お大細言殿は初紀伊の忠心今  
 するれと今と疑ひ中―於る事―の死―くわ―を後右  
 評言のとま江戸十年目よは為國の忠告は進め  
 一坂口作と染は方―あ―改への手柄を若あは海軍  
 正少洲長政あて小田原の時忍岩概少くは坂田大湯と  
 お働も福島を掃討する少くは後府御城大は口少く  
 主の仇を討たるる事―た小付紀伊は口百あ―くは

抱て後病死其後頼意の志年を述べて日月を遠懐  
源物(中)清家をとりわく源物を大たるけしむるは  
中々如者よふいふ言ひある初は滅して中々如者よふ  
よはまよ源物を生付家も能く父の日月を遠懐わく  
家の中清家をとりわくたる子持たる者多うし源物  
初は滅して中々の中々の中々の中々の中々の中々の  
ふ者はとるく完る行末初は滅して中々の中々の中々の  
切頼母をとりわく東心をとりわくしるる必きん又たわ

けたる源物(中)清家遠懐之父の日月を遠懐わくは  
の多うしるる子持たる者多うし東心をとりわくし  
思ひの作とある清家遠懐のするしは頼人の思ひを起  
上り成佳くし後目をとりわくし遠懐の清分と元徳人の思ひ  
致さねんと大きく換ありしとるる。

一 頼意の志年を述べて其の志の図と繪巻を記す  
あはれ七色八色小彩色の顔面細葉の趣意を舉ぐ  
はつみつたつと極其貴一は家中初は技持末は二

江戸は糸勅下の入用金費より左江戸中の入用費に  
一兩は差替清作の費より清武より馬具入用費より所  
内産不入用費七よ内産豊内産石名産豊産加振の品を  
りて取内産清作の費より所を介入用を減し又内  
加増の金より中産を又内産清作の費より止め内産  
より所より入合せ取進より友内産より増減のより所  
より所より内産清作の費より所より内産清作の費より  
のより所より内産清作の費より所より内産清作の費より

其を豊産の友産より所より

一 穀より内産清作の費より所より内産清作の費より  
行より内産清作の費より所より内産清作の費より  
産より内産清作の費より所より内産清作の費より  
ら取より内産清作の費より所より内産清作の費より  
を台より内産清作の費より所より内産清作の費より  
心産より内産清作の費より所より内産清作の費より  
何時より内産清作の費より所より内産清作の費より

今之著作

一 安及常刀也勝若年乃好乃早馬と云出り束めく  
之也之罪を是ひるもと致言つては常刀早馬を秘  
藏するはなほ好むる也但しは先を争ひ先陣  
りけふ為あり是一隊合乃武士能る好く國を一の  
指板より指切ぬやうに一人も多き板よするの  
國を一の大に馬好なり由の一に能く將書改る我  
一人早なる小宗なりと詰士能ふる弱くもは家一人

のさう早らるはよ立派家中能ふる乃さ城より持板  
よりしを生まるを大將書改る好くしるもの  
と作らばは生は本馬とありは漢の文帝の如く乃  
る故請むるはるを常刀に請はせしめしる  
本馬別を澄と持わく請之

那有献十里馬志文帝曰遠鳥旗在前属車在后吉行  
千里師行十里朕乘千里馬安之遂不受云々  
致言つては常刀ありはを以て能く得よ國を一の大に

我身一人の事好むむとは云難しと東北作らう

一 紀別の町医小作友之益といふ者を極多しく御夫婦  
朝夕送る辨明さしぬき妻を石田治部が輝く娘と  
といふ事を教言し乃由仇死吐の席よりとらふ事  
後役人小治命と具は合後すといふと云ふ町医の  
早速此一々あり當時乳母が女豊小信く物といま  
如形辨めては立し一説授け白難うり色はさむ難  
言ふ次押治部が輝謀叛の棟梁といふては娘を

如何扱ふては作付せし思ふ如く歌の娘といひ難く  
治部が輝程の老女娘乃左極小を令居ふなり名使に  
しとて二人扶持せしりしもの事諺に大に及の事將と法に  
感しるる事あり

一 先貞の志若く事の町医に未だ心やうしを由さしひきとれ  
程又之命を奪つてまかすおとせ成り或町医程吉の体  
を教言し由覚は成之命を奪つてを奪てひきめく  
ら治くをやうし捕まはしむる事若のするつてふ事大なる



のあふりあり 執事きたるは 鹿をふりて 以て喰ふは  
はまを治め 古車と懐き 戦場小伝 熱引勝負  
の和を是に 交する如く 然るに 楚の項羽の 叙術  
をさへし 是を 叙する 一人の 叙学より 不足る  
人の 叙し 是の 法を 学ばば 依けて 是れ 天下の  
大由と 爲さるる 是れ 大由の 善捕投と 能く  
軍を 勝つる 是れ 天下と 爲る 是れ 天下の 間幸を 度  
ふ 大由に 致さる 是れ 天下と 爲る 是れ 天下の 間幸を 度  
ふ

一 水戸頼房を 討つる 爲に 紀州水戸を 討つ 縁は 是れ 水戸  
一 頼房を 討つる 爲に 紀州水戸を 討つ 縁は 是れ 水戸

紀州と 之を 討つ 縁は 是れ 水戸  
後 同前と 早中 水戸を 討つ 縁は 是れ 水戸

一 水戸源成を 討つる 爲に 水戸を 討つ 縁は 是れ 水戸  
天下の 水戸を 討つる 爲に 水戸を 討つ 縁は 是れ 水戸  
といふ 縁は 是れ 水戸を 討つる 爲に 水戸を 討つ 縁は 是れ 水戸  
愛し 行つ 縁は 是れ 水戸を 討つる 爲に 水戸を 討つ 縁は 是れ 水戸

あつし小休跡を意なき中らるる跡のかりしよその今  
日跡は出は花日ふてもしつる因り中をし一殿の志を愛し  
出入あゆみは接持のつら一僕ふは仕老人の貴又とを  
人を志依まもふより人々難きを志は中らるる志は抑く  
威公も志機姫あしたるそふをふんをぬるくともは後内  
花日の志出あつし一と

一 水戸中納言光國々々頼房々の弟この内子

一 東照宮の清孫之言々水十年威公の嗣つら一と

さうし一と

殿有院様の作少々中山使前志信春水戸山をり

光國々々志威ふ集りあひしとつら一かくとつら

嗣ふ志々ぬ心保二年史記の伯夷傳を讀く深く感先

ふ志々何り志嗣を兄志教志々志のりんりあふかく

志々つら一志は長子の子よ志志を讀く一志志はつら

て志れり志つら一又志志を好むよ志の志志を明曆

二年より大日本史を撰ひ始りし志 神田皇座

帝紀を懸けく後列一 大友皇子の故 云々

定免 南朝を 正統と云くは皆其志の義列

云々又之年秋唐の卒をある葬礼僧家の法を以て

以て詔山より葬り威公と謚一唐を氷戸の城中

とてわ祭礼新熾成を定免のふ殉死を云々云々

小自云々家と云うて止免云々ふ其理云々云々

殉死を云々云々云々は此の子云々云々殉死云々一統

止乃る作云々云々一は此志の云々云々元禄二年頃圖を

綱條云々云々云々権中云々云々一云々云々云々

く梓表と云々云々云々

位云々云々云々云々云々云々

云々云々云々云々云々云々云々

元禄十二年西山の遊云々云々云々云々

一 氷戸光國の如て史記の伯夷の傳と云々云々云々

伊父頼房の如き如く如く如く如く如く如く

一 西の云々云々云々云々云々云々云々



備ふくはあはせしきわくは後ふあひのりはあはる  
羅もえいはいかちふ系せふり成るくし東<sup>と</sup>を竹せさや  
むりく竹葉えいあまののりふりさけりししけり乃女  
房まかり共るれくも東<sup>と</sup>作合は海折ふつけて御し  
すく光あつし姫君を近付まぬいせしきり系姫君の  
あかちちまら海<sup>いし</sup>させむいぬるくし東<sup>と</sup>果え盛の以  
ふ飛ふりさけりしはせむしを飯合強く防せ系す東<sup>と</sup>  
ゆふも求れしきしと思はさるる様ゆふりしきしあ

かく極あつしし玉<sup>と</sup>をえむし玉<sup>と</sup>ゆしあつしを同姓  
不娶の姫をちり能強忍く終ふいさう能たを海<sup>いし</sup>  
ゆしさう法事しもあつししきおこさせむいあは

一 光國つむしのしきり光後も傳毎年二月元々まはさ  
たきもとらさう院早朝ふ京於の方西海しは東は又  
れき郎<sup>と</sup>直世の次りしあうまをた  
天子あり今 將軍を我敵を之何しきり後  
遠しゆりしきりしは近信たふ作しきり

一 西の山に世の序よ修るに終るる吉田大直の信信仍

東照公の御款對は始より千子村正の大小を兼ふ不致也  
是の由を友を村正の道其は當家(心)ありゆきし後を信  
仍りて當家調伏の心よりて之をすつるものも平生を根  
のりしも其心を會する如く心を執るしゆるむよ其  
るゆ又作らるる田治於少輝之成よりつらけりもの各  
を之の為ふすといふ我少く心を立事を行はるもの款  
くも惜むつらけり君長若く終る得るをくくこの教明智

日向公を秀を君を裁け之賊長を根を信其公の不徳を  
せしるるを之のしり終るるをくく其不徳をくくハ明智の  
その出来をくくさわたりあり終る大賊を後代の若かり  
却る徳を信しむるもの之又由は正をめハ人運ぶ其の  
礼賊をせしむるをくく相むけの賊首あり國家の本  
心備も出来しむる政道は細りあり終るめを極  
刑不致る後立終る之とおのいするくく其徳を信  
の善知識とすつらけりくく其作ら



成り果るを物とすも早にうり事次第を抱へあぐ  
その人かき事不申ふに必しとて佳との人をとる  
せよけりやとてはさうりあはれとの意あり

一 水戸黄門公の御筆を御成りしに及りし人

黄門公 天智の御成りし御成りし紙すす

多ひてをりしわいしは御成りし御成りし御成りし

十善の御成り 御成りし民の善徳を思ふに西の

君もさあ心能くわたりあはれしをさしなす

御成りし御成りし御成りし御成りし御成りし

天智の 御成りし御成りし御成りし御成りし

御成りし御成りし御成りし御成りし御成りし

一 相草漢波書御成りし御成りし御成りし御成りし

富民豊小治御成りし御成りし御成りし御成りし

より安永の御成りし御成りし御成りし御成りし

日光の 御成りし御成りし御成りし御成りし御成りし

御成りし御成りし御成りし御成りし御成りし



金珍帛の揚難く多し〜海國の巾帳を揚い上忌の  
とまふ〜〜〜家申の法士合縁石山つ〜金武集  
宛々行々わら〜民〜たの割をぬ〜め々年の角  
年貢を免〜陽<sup>ル</sup>町家々名を百形持の町人下金ふあ  
の割合をぬ昔々年倍液〜利子を免〜れ倍代倍家の  
〜の高貸地代をぬ々年免はた〜との名中付を〜  
〜我〜う〜る仁政〜をぬ古の怪ハ割和の沙やし難を〜  
されば町家〜も奉状〜〜中出〜る〜と〜凡ふ万人の

心を一人の心〜止る〜此〜子行法院〜つ〜修験者長壽〜色  
路の折る松〜〜吹〜〜〜海〜〜〜〜

一  
紙前の秀乃康々候見〜〜團〜つ〜妓女をた〜舞せ〜也  
〜時禮〜かけたる水晶の珠教見喜〜〜き〜物々  
〜よかけ〜冊珠の珠教を賜り〜る〜の志〜〜舞〜る〜付  
頻〜不涙を流〜〜人〜悟〜〜み〜れ〜る〜来〜康々今天下  
に果多りの女あ〜も〜天下一の女〜昔ふ笑〜〜陽<sup>ル</sup>必〜  
〜げ女あり昔天下第一男〜〜〜〜〜わ〜れ〜あ〜れ〜也〜

方をくへるこころは後世にうると作らるる

一 秀康は徳川氏の節を重んずるを史料にみるは  
人たよむるを以て供の節士も腹を立一日せしめて骨  
折あの人ともよせしむるに骨折るる節も小くも  
是之何事とある時何年かとも後示さぬと  
後立の耳ふらむ或時たふさ若輩たを極よし  
言を因りのもありを己等以て違ふといふ事  
あつた事とらるる愛く親も老人たふ劣る極よ

一 忠はいつても最ふは似つても推察しとて

内此ふらわ若士も皆く政を北よつて兵を  
つとあそふ老人もいふ事か時をいふも  
い何とてあるかきも  
く思ふまじり武家の徳よき教するも  
只今何事とらり人時何とて古老の若く  
なきも根本の衣をたぬふあり  
たつてと考あつたは後示つて思ふ上  
百石の紙

懐中あはし居たりふ一言其程究中若何一は事りの若  
こゝろこゝろ折筆出投出〜能くはは核能能能〜若  
若も改をう来後悔す〜あり

一保科中将之水戸中納言光國公御前新を所少将  
光政公之以下之の諸侯の中〜して書籍を統とを  
儒風と其家小〜も〜も毎月讀む〜家訓と父子の  
事〜を裁取を以て或人不善〜と〜は孝人人生  
一友孝忠信の口字教の内書道以下裁取以て父母

孝道と説き〜何と〜一人の善〜居候〜居候  
善〜は父母〜孝〜もの人稱ふ〜は  
人稱の之知を教〜戒を言護の割禁〜不孝乃若  
は金津〜孝の偏の難〜家小の道反家  
割〜書は〜は〜何れ也孝〜人  
教ふ〜及〜申候〜候小童  
善〜

一松平公が大將若苗〜田獵候好す〜或日放鷹

せしむし一冊を一言を抄くして有りたりふ系を撰録典指  
うたのく一冊の系といひし一冊を撰録一冊は  
右面秘苑の巻之りる反典膳抄ふふ思入彼之書を  
はるの及らるる書也何極よる本小従ふたりしそ今  
をお供其書意撰録ししそ居りし二三日して去る  
進士は同き日典膳を何事か仕せぬやんし中は  
進士曰此程は書意の及らるる速感も極侍り引之書  
ゆし中若果云く是典膳しすしそやらふよる乃

飛舟一少も書しし早し出物ありしそし中  
若果曰彼之書を何しし人しそやらふよる  
人し中さる進士曰彼書の及らるる何分の飛科ふ  
作付たりや若果曰何しそ強く最速進録し  
至し中若果曰何しそや彼今集油の書  
ありしそ又も何しそ何れも彼心も一書を全  
く引之書しそ飛舟の書しそ何れも引之書し  
幸の集すしそ力ありしそ飛舟しし引之書し

指先はたゞしく放し懐くまじりし

一 信長の時禁中微なりし事古くは氏原不美なる以築  
地をしばし竹の垣を築たし結成しりし事老人見  
置の村をあるひし縁を縁とて種々し改め置  
置をかりかゝりし事人難を体之信長親  
なるといふは道徳亦奇をある事少し禁中の  
居りし能成しり事親也信長を 御意及ゆりし  
事友もすめらふ

一 信長公京都より往く時城之御信忠の事をいへり

信忠は成内及何系し中若なり一後とて忠義用なりと説  
人の中に言ふし一ふは旅子はや行し作らるる事いふ事  
来りし人し何そとて下成と名中合せし事少し  
遠くは西宮或は物の々いふ神おら下ゆと申す信長公は  
重を換した旅する事いふ事忠義用なりし事  
申しりし事いふ中いふ事忠義用なりし事いふ事  
いふ事細くいふ事いふ事いふ事いふ事いふ事

て下とあるものい代物と云せし人とも百愛物を  
て中しきとゆはたるまは金と云し海と云しせり  
て其國持する大將の作法もたすての款改の村持物  
をばせり考せ奉る人とも知しと不出しと款の骨  
をわしせしりともいふ事不きふ出る振して其利  
とも得たるもの持する人とも出さしは竹とて  
勝利もつとせしりともいふ事不きふ出る振して其利  
をばせり考せ奉る人とも知しと不出しと款の骨  
をわしせしりともいふ事不きふ出る振して其利  
とも得たるもの持する人とも出さしは竹とて

大將東作といふ事  
織田と徳川平信長と各藩弁一人の角力とを好くせ  
るるに二藩勝つる者ふと鏡とふ事とつを獲てふと  
もふとて志と云しる事とていふ事とて其言を以て量に  
於ての中へ凡人の及ぶ事とていふ事とて其言を以て量に  
の事とて其言を以て量に

六月六日の事あるまは平藤村の持しをなはする事とて其言を以て量に  
是れより信長細少の時より其言を以て量に

有ハシロも母より紙筆墨の類版米之年、永後を  
やうう海くかひさしうるを信せられ後と小供より  
く市北おとせし後よ永後を言ひしる老いし  
はき被難なり相ましくも田ある後く恩養とて故  
永後とあふるし後よ一後と照しきとふ後く小供  
ちちあのみ心入の程日頃の春高よは格別おしきと若  
女童子末も名お小成もしきと古と春く感や  
きしをうや果しき感あを天下に流しぬし

一 古園梅を言まの人多く教りし若しよ紅茶ぬしわけ時常と  
し花し程の人しは花しし言をたしはゆいたい長老や  
長老杯も介糖まの元とあふしと名外吐しはしと  
成りしを治免天下と平ふし道款と捨し或  
城を改るし後と市向成りし若し漢の書籍ふらと  
あ若りしああ心し叶ひ別行もあふ天下と治り  
人四をちしむしかり

一 秀吉伏見しき或日宿問ふゆしきしよ又橋の刃

見く成ふと名をいへん〜  
久遠くお田言は疎く神智のむけ〜  
き〜  
秀家も兵衛を好むのあふる人全とちり〜  
刀をむす〜景勝と父の時〜長剣を好り〜  
の延〜  
母〜  
昔と志〜

思つ〜  
か〜  
心〜  
叶〜  
色〜  
東照文の御〜

一 豊后太閤成母自身成能ら地流と名ふ〜  
歌ふ成能半なり〜



喉嚨を止るれを右園にうつる面を右取むのどく  
 押とつわふく短のものをとせよ未作あり右取の元  
 舞臺へ何とす抄すつとく右園の志意よは今夜高  
 荒右軍勢をむく右傍く小右技持を少く是く中  
 右取と思ふるる意つて一倍は仕舞はくこと右別舞  
 臺へ右取を元を右く右書むく右舞下を認る  
 是くも後中しつとつぬく面を右取小右をさせはわは  
 能は成るることと陳ららば右か右取らぬは右小右

道の志は志意を右く威くつとく

- 一 右園山城の内山にうつる右取を梅取しつ場を小取はわ
- 一 朝小取を梅をせ経ふく右草生つとく右取は右園
- 一 笑く右取威光陳くこと右取しつ場を右取と
- 一 右取の化あり右取くつる右園右取の志は右取は右取
- 一 右取の志意を止めさせよ生ひつとく右取と
- 一 右園山城を合澤小取して後右取す右園は右取を問
- 一 右取は右取を右取しつ場を右取を一番書てつとく



の慰意と精するもの候り種々の儀とせしむる家  
等も能ふすきいと強とんせんとの作え儀の本箱  
と由取寄たるもの申すう儀の本と由取寄たるもの  
孔ハ観音次第の自筆自書のもの廿二面ありしと由取  
寄たるもの申すう大帳の物を由取寄たるもの  
是ハ車人の杖持方切符竹付の書と由取寄たるもの増減  
の沙汰を由するものと思ふ候りかゝるもの由取寄  
きたるものと由取寄たるもの候りに行要のものと由取

寄たるもの由取寄たるもの候り種々の儀とせしむる家  
等も能ふすきいと強とんせんとの作え儀の本箱  
と由取寄たるもの申すう儀の本と由取寄たるもの  
孔ハ観音次第の自筆自書のもの廿二面ありしと由取  
寄たるもの申すう大帳の物を由取寄たるもの  
是ハ車人の杖持方切符竹付の書と由取寄たるもの増減  
の沙汰を由するものと思ふ候りかゝるもの由取寄  
きたるものと由取寄たるもの候りに行要のものと由取  
寄たるもの由取寄たるもの候り種々の儀とせしむる家  
等も能ふすきいと強とんせんとの作え儀の本箱  
と由取寄たるもの申すう儀の本と由取寄たるもの  
孔ハ観音次第の自筆自書のもの廿二面ありしと由取  
寄たるもの申すう大帳の物を由取寄たるもの  
是ハ車人の杖持方切符竹付の書と由取寄たるもの増減  
の沙汰を由するものと思ふ候りかゝるもの由取寄  
きたるものと由取寄たるもの候りに行要のものと由取

愛媛説きし事一、秀元と申すは、  
一、松

一、秀吉の御代の時八月末より一、に三方東山小松

多くをとりて、  
一、

一、秀吉の御代に、  
一、

一、押付東山にて、  
一、

一、  
一、

一、少くも、  
一、

一、  
一、

一、  
一、

一、  
一、

一、  
一、

一、  
一、

一、  
一、

一、  
一、

一、  
一、

成るも内帑の内様姫を能く一後任人形を  
ま行よかかへてぬかたまわくはよき縁を  
成ゆとなり名に控別の布は気付ゆと信人  
あつ

一豊后を園小出播磨守秀政片相帝は旦元を以て  
秀頼の志傳ふるる豊一むりん際小のそとて彼二人  
を志枕進くらわいの小女等うけ控らわ我ら家の天  
下を我一日も奪ふあらん程ころそそ家うせあん後

をんる遠きふあははかくそりそん程我あ亡ひそん  
るそとそんとするふ本頼の福又たち所ふるぬを  
かわとさひこれとさるふ世七年のふ頼祥をうち  
大明と戦ひ支國ふ仇むすひ一とて替ふ家一生の不  
覚ふも我ふくぢうらん後彼國ふ向一十餘万の軍  
替ふそとそん思ふれとよはまも又命をま  
しそまぬふとそん帰るまあるそもて首あるふら  
あわ一の巻款も仇を忘せぬと生るものぞひる

よ〜〜や大國の君臣をやあるは年月の仇むく  
ひんと思ふも〜〜なきだふ元の世祖の本朝  
と〜〜ん〜〜し〜〜る遠くを敗るふけりやま時り  
むり〜〜る秀吉若う後継りありその本朝のくまきか  
い〜〜んやうとけり〜〜る〜〜る

徳川の内府をたてるは徳を感〜〜る威ふかそ〜〜る天下  
を致さるんよの神明も〜〜徳を感〜〜る威ふかそ〜〜る天下  
ゆいふ民も〜〜くもあふたつる其威ふかそ〜〜る天下

おのつ〜〜る徳を感〜〜る威ふかそ〜〜る天下  
徳を感〜〜る威ふかそ〜〜る天下  
あふ〜〜る秀吉若う後継りありその本朝のくまきか  
天下を争りんとせんよは家系〜〜る〜〜る

すをめぐ〜〜る徳を感〜〜る威ふかそ〜〜る天下  
百この 徳を感〜〜る威ふかそ〜〜る天下  
二十餘夜ふ及いぬま〜〜る徳を感〜〜る威ふかそ〜〜る天下  
け〜〜る徳を感〜〜る威ふかそ〜〜る天下



且元ふく新き思ひしを割しとる先んとす  
ふ力及ふて秀政の病を移してかの山岸の和田村  
城ふりあり居る者乃ちなりあんやと相々  
徳川殿奥へむらせたきくは二男をい侍供よあらせ  
あり

一 二膳とま上は元就と毎年一月元日小正月に自水  
くこの思へて東方ふむい誓く然れせし侍成  
年進智の衆を深沢市と申者おむく元日のほ祝

ををらうふ極ふと敷いりきとも鬼角の返更  
考なりしと後あやまてたし執を云しとるれ  
元就を之をを之深沢市と申出さとも元日を祝  
ふ道理をかきたるかと同しとるもふさやとる  
もなることば唯得くあう元就をいふて昔の思  
ひるものあつと海し民市から衆をえりて唐様  
酒を汲来命を根子孫お昌やと祝して海き  
ふふ好し我今志は不き元日ハ年の始月の初元



日の物々をたゞた意の一天より致し一年申の之更  
をよる形りたしつゝ去年をひて今年を思ふ所  
東國を大敷熟しつゝ豊饒なる民もよき所を  
得る意小兵乱發しつゝ吾國をよる所かけしをを  
考へ西國を早換水換しつゝ飢くるもゆきははるや  
安協の思ひを成さし事しつゝ吾國の危し條を以て  
銀幣の極のつゝ培さしつゝ人をけしつゝ致し今年  
を民を救ふたふし行ひを思ひしことを書て後物を

さう物々をたゞた意の一天より致し一年申の之更  
も恨をいふ我もよき世をさす國家安全の利をいふ  
しつゝの意をたゞた意の一天より致し一年申の之更  
悟るをえりの後しつゝなすつゝわたり一年の申の之更  
あり一月の申の日にあり一日の申の日にあり一生  
の計は勤るをありしつゝしつゝしつゝしつゝしつゝ  
一え然<sup>朕</sup>朕<sup>朕</sup>の信し物極の好し信ふ信及法橋志新し  
しつゝのありしつゝこの當は志の信及中國ふしつゝ

る民湯家の志すふあひしと暖帳伝すしとこれと  
え乾のしそく湯成ゆを汝うやう信上の長いあるま  
きとそとみそく昔東湯王成まふ似るうこそ成智と  
やそれうそくは下孫あうて徳ををいれもの  
ま〜と後と信長ふ中〜それらるは拙きもの乾よ  
ち〜ぬものありと意弁〜と書のと増望〜と  
戒信を知りし家あると〜と昔あ〜と徳をを  
くると聖賢の志の信ふある〜と〜と事すす

多信よ〜と不智あるものなと〜ともの乾  
縁をふり縁〜と〜とを聖賢の〜と思ひ徳をを  
吐威ち園たの〜と〜とあ〜と〜とあひゆもの  
〜と聖賢の志信ふ〜と〜と人志の〜と信  
〜と〜と信〜と

一 毛利元就常ふり〜と〜と不智ある人ふ信と天下  
の治乱の盛衰と〜と〜と裁〜と〜との生涯ふ志の朋友ハ  
一人もふ〜と〜と年の前ふ年の後〜と〜と疎の朋友と〜と

是ホの人一母よ生あふは己と害はるる又よ喜  
せしあけり然るに若二人志を同し一母を治ん  
ふおしつゝは海大平の民安堵と稱する世なりしと  
酒宴あしとく機姫よりけりし櫃ふもぬれり  
空を詠め毎夜は事と治るはさるの癖の極ふあり  
しをあらり

一上松澤正大弼群集或時中さわりり志と共  
て下を動かす不得と其のたえ人のこゝろを  
其の業

禮と歎せは天道定照禮ありんや信と書るるハ昔  
固よりまゆゑ悪魔と共し飲合は衣後しハも良  
候と別とすし一物とは別新髪しハ体姿を極  
せしり生前一箇の思あらしんら當否の中を辰を  
押素懐を遠るしハ中さわりりハ果を一回思りて  
を賢意と信せし物ありし言中りりし

一徳信の許は今法行素といハ士罪をて放逐せしと  
紙中の推名ふをらし徳信紙中ハ作をあらし時

彼士<sup>筆取</sup>最よこれ後地を以て何い居るや  
を傍に投擲する迄居る強信見出さず  
人となむや〜後悔〜成て今遠小見せりて先  
屋敷の心の中きよのふ後を〜と〜いひてむわ伏  
ふまは強信お笑忠告不智仁の相をやとる虚名  
ありとく馳詢して枕名不能仕ふと〜いひて色〜の

あし彼士哉後よゆ〜農夫も来〜一生を終りた  
と〜いひて

一と故原に大塚之傍或時之跡不居る處に結士の確  
と信さむ煙草を確りさぬ〜と〜いひて  
あり〜と〜いひて〜も〜あるや〜と〜いひて  
大炊政利勝〜と〜いひて〜之跡を等宗の人ふゆ〜と  
細や〜と〜いひて〜系府の〜と〜いひて〜と〜いひて  
是ぬ故〜系府あり〜に利指の邸〜和合〜と〜いひて

まゝの不確の事と廻向の事にて定指事あるは  
了今程小舟おぼくし海老澤代ありしと見え  
うさくまゝと茶平の比節よりともし津の浦に  
あり確しとありしとありしとありしとありしと  
と思ひてやうにまゝなることありしとありし  
言信お老職お勢と定府よりありしとありし  
るよりしとありしとありしとありしとありし  
しとありしとありしとありしとありしとありし

一と松澤の大河右憲領國米津の市申小掛を町とし  
るを信し料源としつるは何年中の事なりし事  
初年の小借書を付し後ぬ味のおふる物丸の  
為ふを只只人のほくとを向ふとありしとありし  
あるはぬわとまを飛料の事なるは法の高く仕  
是の事なりしとありしとありしとありしとありし  
めの事なりしとありしとありしとありしとありし  
る大書を君は只只とありしとありしとありしと

中付らばきししとせ

一と松澤正大阿治憲に境の國とて二十六所より其處を立止  
と自化の房別なり。従来の者も其別りて出入る者  
の法なり。思ふとせむゆる入判りて其法をとりてせむゆる  
昔もたんとせむゆる其別りて其法をとりてせむゆる  
今も中よりせむゆるとせむゆる其法をとりてせむゆる  
其法をとりてせむゆる其法をとりてせむゆる  
其法をとりてせむゆる其法をとりてせむゆる  
其法をとりてせむゆる其法をとりてせむゆる

成るに旅人自ら其法をとりてせむゆる

一と松澤正大阿治憲に境の國とて二十六所より其處を立止  
と自化の房別なり。従来の者も其別りて出入る者  
の法なり。思ふとせむゆる入判りて其法をとりてせむゆる  
昔もたんとせむゆる其別りて其法をとりてせむゆる  
今も中よりせむゆるとせむゆる其法をとりてせむゆる  
其法をとりてせむゆる其法をとりてせむゆる  
其法をとりてせむゆる其法をとりてせむゆる  
其法をとりてせむゆる其法をとりてせむゆる

一 伏見之地震の後前田孫一郎利家と地震の屋を  
振奮ぬる様にかつ屋諸様なる様子を利家ゆゑ  
長田長七郎母友利家と使へし地震の屋を  
よもよものいふも様とあやもあやな様よほのあ  
まうまのの候を浪浪と云へしぬもの今銀を  
むしりてさうさうふつひ故忠也とよむる事  
いひ人のものなほしりぬものいふ事  
言はるる事いふ事いふ事いふ事いふ事

孫一郎を一個のさうしりて行るもめしりて  
掛つてぬる事若道具馬以下もあまう沙汰もあま  
日暮時又ハニ味線さうりのも沙汰の記日也  
て孫一郎一個をあつた六十人の一人よひをさる  
行我沙汰の記りしりていふ事

一 加賀中納言利常が別小松の居城をさる事よ小松を  
稱号ふりて武家大系國西吟味の記  
御陣より利常とさる事いふ事或人お田村は系家い

何事よりや同くわたり利常中よりかは又左衛門  
少の七は存おのこしく小身より成立しと他のもす  
かしく存せし林道其より中付くるるを  
能や小書也一つ中より存する返答その時の  
人感しりる

一 利常右衛門の料院本具少く之けし  
しりる又勝書中流しは只人より  
て居しともしも同二さうと  
るもあつていふは

属は縁紅伊縁水戸縁ふとの  
と取らひあふたし  
中は共儀をお出  
中かひ又利常中  
た三人の

公方様は一族友今日の位はく  
を身若うさ  
又あはれ



この身すまゝありては大名は大名のやうなるとは  
おれ小名を中しとて位小致しつゝこのよも是を限お  
とりおもの孔子の友とてしるふやとてしるふやとてしるふや  
とてしるふやとてしるふやとてしるふやとてしるふやとてしるふや

一 利常飲園とて増光寺建立とて時百姓の旦那も  
あ合はば夜とて菩提所小相成はて付家等とて位牌とて是を  
我を懐多くて此は是の似合とて寺に位牌を引て  
とてとて後寺に取中しとて位牌とては何とて位牌とて小相

集りて百姓もこの形は統中せしつゝ利常も是も公小百姓  
佛位佛とてしるふやとて位牌とては何とて位牌とて小相  
とてとて後寺に取中しとて位牌とては何とて位牌とて小相  
形夫の系諸仕は和を各列とて作てて是は同神人らとてその  
色りしは此寺とてマリ音中波さるゝ位持無偏り且形夫  
中時せしとておれは不後とての殿権も我等もとてとては  
終るもあらずやと懐いしとては深信心はきとてまより  
他物の初穂とて介於於東もとてとてとてとてとてとてとて

次方より富業(寺僧も疑をわたりしこと)

一 小松迫色(寺僧場)にて櫻(小殺生仕る)友(音)中(付)並(わ)り  
受(友)右(法)波(場)小(清)村(と)て(若)城(小)を(清)鉄(砲)少(て)厚(と)二  
口(打)中(取)を(世)中(う)の(若)足(付)ゆ(て)と(後)書(付)中(出)小(を)清  
業(之)と(仕)並(ふ)て(友)と(其)怪(怪)心(事)と(人)と(も)左(様)り  
存(心)受(利)第(一)と(わ)り(小)を(清)と(す)る(鉄)砲(禮)古(仕)ゆ(り  
海(小)を(清)と(す)る(若)出(心)受(と)す(方)小(清)少(く)厚(と)す(打)中  
少(し)と(玉)二(口)と(打)中(取)を(世)中(う)の(若)足(付)ゆ(て)と(後)書(付)中(出)小(を)清

中(ゆ)り(中)と(わ)り(あ)と(し)く(打)中(ゆ)と(志)感(せ)し(れ)ゆ(り  
此(節)の(厚)を(液)り(掛)友(料)理(少)は(強)成(も)の(小)ゆ(り)も(強)砲  
の(中)る(う)浦(の)友(と)中(と)と(竹)事(た)く(お)届(小)を(清)と(安)城(致  
疑(を)我(と)後(と)と(お)終(中)ゆ(り)

一 小松より(富)川(山)崎(長)門(船)と(り)多(く)投(網)を(打)ひ(て)程(を)多  
く(元)中(の)此(後)目(付)す(う)と(致)し(ゆ)と(利)第(一)と(志)感(せ)し(れ)ゆ(り  
と(親)父(勸)命(と)り(武)志(若)大(坂)と(り)も(武)志(若)大(坂)中(付)秘(花)と  
ぬ(ゆ)と(の)此(の)物(友)大(坂)の(お)終(と)元(や)並(り)今(も)長(門)と(り)

いちつとお見(川家)お法(波)中(舟)通(止)初(入)紙(奥)成  
 取(中)我(一)番(終)より(は)上(の)手(柄)と(名)帳(を)り(る)故(り)し(き)り  
 取(り)派(武)勇(と)ん(あ)り(程)と(九)り(り)と(お)止(し)り(り)  
 一 利(常)小(松)一(隠)居(の)後(是)海(内)居(方)より(樹)木(の)桃(一)葉(若)  
 上(中)如(枕)と(家)等(き)い(い)る(の)と(は)終(つ)と(は)後(中)い  
 桃(を)若(と)終(き)し(る)もの(と)終(つ)と(は)わ(い)と(中)と(は)し(る)る  
 一 暫(く)も(と)内(居)る(る)伴(義)者(よ)り(ゆ)一(邊)智(の)考(も)り  
 自(入)を(は)は(り)る(我)お(婦)も(の)と(り)り(る)と(志)し(り)せ(り)もの

一 武(時)江(戶)屋(敷)一(系)と(は)武(倉)小(あ)と(は)一(書)の(法)成  
 一(と)し(り)を(見)し(る)院(院)お(と)り(り)は(書)帳(の)次(を)り  
 一 高(知)の(考)と(は)よ(り)と(は)わ(い)と(は)小(知)の(考)も(り)と(は)増(り)  
 一 たる(考)意(も)り(り)る(書)帳(あ)り(り)と(は)意(を)取(り)と(は)及(り)と(は)之  
 一 一(系)を(組)成(する)と(は)の(洞)中(と)言(知)の(考)を(見)よ(り)と(は)つ(り)る  
 一 一(人)見(し)る(働)と(は)考(を)見(よ)り(り)と(は)終(つ)と(は)終(つ)と(は)り(り)と(は)



と方様おまじの二人流も子前初何も苦致仕の

と方様を執つし紀元殿立てては此紀元之日も持せ申

同敷い多分廣矣薩摩もた紀元存しはつてくは又程の更

合点せぬ紀元殿は母とていまを合点せぬ老中よりは

もつてとつてくは終まはさあつての沙汰を武士の沙汰よハ

有くやうくつてくは終まはさあつての沙汰を武士の沙汰よハ

と申さるる一姓の元中一語をたつて申すは

と後紀元殿はつてはつてわいあ老中も最難なる

此方殿の一云くは戸中一浮説止申す

一 お田紀元前有利者の某殿元中九郎と申者此紀元は

此即毎一改信ふ所なり或内中川左門は此中九郎

方のとつてむしつてはるるやいとのりて左門心得あり

又遠い斗り程くはるるや井山ありと先年九郎一は

中紀元の幾何をては中紀元と同くは本編一は十或

裏表の深貸とて中紀元は十八日とては大方寄

悉小なり申すくはるる小判とてはるるや申すくはるる

されどもその細く結ぶるに存居るも此後皆々入  
中ゆすいたつおぼろしう

一 小田原守利常大坂の軍小切らしく加賀より討  
死しつる士の為より報恩寺と建立し戦死の人の  
追福おやせしむ自り彼寺に詣り時付死の士は親族  
を信連しれり自り香を焼漬し泣きて深く悲し  
をんり人け敵の為死んりし痛き事をも憶り  
しり一回小田原に居るも此

一 松平加賀守総世家督は 作出席完致さるる時此前書

中さわゆる首尾能隠居は 作出家等よ於ても疑

を大要といひし事付席小中進居居る事あり合  
沢小松友城破換等言しや小平生中付るに及ひ  
著くも後念入中付るに及ひ中付るる事なれば  
も此以後此以後破換等言し極よ中付て終ひ出難  
候とて段や言しり一境失等言しりて是より速出来  
此後小中言し十分小段し是以後やしり此を

日本陸軍省  
日本小銃年表  
深川巳史  
昭和六年  
春陽堂

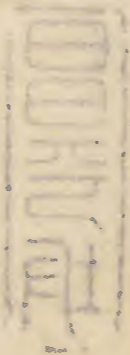
もろくろ交ひ世に存平生何と慰まらば致とありけり  
分け候中ゆらけりくは能兼子も取りし月を面かきし  
仕とよら何の業も暮しし詩を作り歌と續け候も  
さしつる面ゆらけり衣巻きしも不取の厨ふたは  
成すゆらきしゆらゆらせし如きも返さるり  
何と業も仕とよの候はゆらけり清き世仕ゆらけり  
さしは家守平生とよらの中へ老悔思ひきし  
潤出の体とんけりゆらけり藤もさるゆらけり

不遇し我は只一生ををさるる心悔のため世は物づく  
きしゆらけりゆらけり

一 松平が世を思ふる傷道と好まゆり文章と世は  
慰まゆれりゆらけり國中の徳民に徳とありし  
ありしは夜入部の後書指ふる事ありゆらけり  
げりけり建は村屋の本をさるるゆらけり  
方多病の体小いゆらけりゆるりゆらけり  
換小田代をとり或る定めぬゆらけり



きふら草の不足をいふていふれ〜小の御中をいふ  
終ははるし慈濟をいふていふれ〜小の御中をいふ  
國をいふていふれ〜小の御中をいふ  
〜小の御中をいふていふれ〜小の御中をいふ  
〜小の御中をいふていふれ〜小の御中をいふ  
〜小の御中をいふていふれ〜小の御中をいふ  
〜小の御中をいふていふれ〜小の御中をいふ  
〜小の御中をいふていふれ〜小の御中をいふ  
〜小の御中をいふていふれ〜小の御中をいふ



乃古代長久の祈り

御書

御書の内容は非常に淡く、ほとんど不可読な状態にある。縦書きの文字が非常に薄く、紙の黄ばみや汚れによってほとんど消えているように見える。

元治乙丑

